
我楽多

市太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我楽多

【コード】

N5608Q

【作者名】

市太郎

【あらすじ】

自分得で萌えゲージを振り切ったネタあれこれ投下。

【幸運と必然】 初めての言葉はクソジジイでした

大国と言えば誰しもが最初に名を上げるであろうスートニア帝国。どの国よりも古き歴史を持ち、尽きる事のない豊富な資源を元に活気溢れる商いと、物資目当てに絶えず行き交う人が人を呼び込み金を落としていく。

国の懐が豊かであれば当然軍事に金を惜しむ必要もなく、スートニア帝国の軍事力は他国の随従を許さない。

栄耀栄華であるスートニア帝国の皇帝には皇妃と側妃が三人おり、一の側妃には二の皇子、二の側妃には一の皇子と二の皇女、三の側妃は一の皇女と四人の子供に恵まれてはいたが、皇妃だけが未だ子供に恵まれていなかった。

しかし、漸く皇妃にも懐妊の兆しが訪れ、無事に三の皇女となる娘を産んだ。

美姫と名高かった今は亡き皇太妃と同じ黒い髪にハシバミ色の目をした三の皇女は、前皇帝より皇太妃の名であるアテリーズを与えられ、前皇帝からは勿論のこと皇帝からも殊更可愛がられ、皇妃に至っては腹を痛めて産んだ我が子を憎く思うはずもなく、夜は乳母に任せはしたが昼は自ら母乳を与えるという可愛がりようと、帝国の権力者達の愛情を一身に受けた皇女であった。

その恵まれた皇女であるが逸話が多く、巷間に諸説が飛び交うほどである。

例えば 。

元々、皇妃と側妃達の関係は仲の良い姉妹のように睦まじく、側妃の子供達も皇妃を敬い親しんでいた。

アテリーズが生まれてからというものの、兄弟達は代わる代わる皇妃の元へと訪れ、幼子の愛らしさに目を細める日々を過ごしていた

のだが、アテリーズが生まれて半年ほどが経った頃だろうか。

その日は珍しくも兄弟全員が揃って皇妃とアテリーズの元へと訪れ、憩いの時間を過ごしていたのだが、そこへ嫌われ者のルードグ侯爵が押しかけてきたのである。

ルードグ侯爵はアテリーズの後見として名乗りを上げていたのだが、皇妃が快諾しない為にこうして何度も押しかけては必死に自分を推しているのだ。

後見と言ってもアテリーズは生れ落ちて直ぐに皇太妃の領地を頂いている上に、父方の財力は言わずもがなであるし、母方の実家も五大貴族の一家として名も高く、金銭的な意味での後見は不要である。

この後見とは、主に教育へ多大な影響を与えるのである。

取り入れる勉強、濃度、教師の選択、婚約者候補選びなど、時には母である皇妃や側妃よりも後見の方が強制力を持つのだ。

おっとりとした皇妃ではあるが、強欲で傲慢、権力を鼻にかけるルードグ侯爵を愛娘の後見とするにはやはり抵抗がある為、それとなく断っているのだがルードグ侯爵は一向に聞こうとしない。

連日と押しかけてくるルードグ侯爵に皇妃はほとほと困り果てていたのである。

「今日こそは、快い返事を頂きたい」

「そうはおっしゃられましても、アテリーズの件に関してはお義父様にもご相談しないといけませんので、私の一存では決められませ
ん」

「ですから、皇妃様より一言口ぞえを頂きたいとお願いしているの
でございませす」

短気であるルードグ侯爵の態度は子供の目から見ても横柄で、黙
つて様子を見ていた兄弟達もこれには思わず眉を潜め囁きあう程で
あった。

立場を弁えず、詰問するかのような口調で皇妃へ迫るルードグ侯
爵を、流石に不愉快に思った一の皇子が諫めようと腰を浮かせかけ

た時である。

突如、アテリーズが疇でも起こしたかのように泣き叫んだのだ。

お腹が空けばアーと小さく声を上げ、おしめが汚ればウーと申し訳なさそうに訴える程度で、とかく乳飲み子らしからぬ泣かないアテリーズが力一杯泣き声をあげている事に、皇妃を始め侍女達も兄弟達も驚き慌て始めた。

「つく、ジ……ジー、やーっ！ やーっ！ つく、ジ……ジー！ やあっ！」

アテリーズに慌てて近寄り抱き上げて乳母があやすも、おさまるところか一層激しく泣き声をあげる始末である。

しかも、その泣き声が幼子らしからぬ様子で、皇妃と乳母は困った表情で顔を見合わせる。

絶妙な溜めを入れて泣くアテリーズに、その場にいたルードグ侯爵以外の誰もがいつしか心の中で合いの手を入れていた。

そんな中、腹中というスキルが未修得である二の皇子が、皆が思っていたその一言を素直に口にしてしまったのである。

「つく「そ？」ジジー！ いやーっ！」

ルードグ侯爵が咄嗟に、一の皇子に口を塞がれている二の皇子を睨みつける。

が、二の皇子の言葉に二の皇女が晴れやかな笑顔を浮かべて両手を叩き合せた。

「まあ、アテリーズだったら『クソジジイが嫌だ』と泣いているのね？ もう言葉が話せるなんて、凄いわ！」

物怖じもせずに笑顔で言う二の皇女を誰もが驚愕して見つめる中、ルードグ侯爵は真つ赤となった憤怒の形相で、挨拶もそこそこに退出していったのである。

途端、力一杯泣き続けていたアテリーズはピタリと泣き止み、疲れ切った様子で乳母の胸に顔を埋めて寝入ってしまう。

皇妃と乳母、そして兄弟達がアテリーズをよくよく見てみれば類は濡れた様子もなく、ただただ声を張り上げていただけのようにあ

った。

「……アテリーズは皇妃様がお困りなのを見かねて助けたのかしら？」

「そうかもしれないね」

二の皇子と二の皇女が顔を見合わせて笑みを浮かべる。

その様子に、上の兄妹、そして大人達が苦笑を浮かべた。

その後もルードグ侯爵は幾度か皇妃を訪れたが、その都度アテリーズが泣き出すのでとうとう諦めたのか訪れる事はなくなった。

そして、どこからともなく城下へこの話が流れ、民からは特に嫌われていたルードグ侯爵は物笑いの種となり、良くぞやってくれたとばかりに生後半年にしてアテリーズ株が上昇する切っ掛けとなる。

スートニア帝国の三の皇女、アテリーズの逸話の中でも特に有名な話の一つである。

【幸運と必然】 気合を入れたら噛みました

どの世界であろうとも、女性が集えば賑やかになるのは常であり、ここスートニア帝国の後宮に勤める侍女達とて同じである。

勿論、口にして良いか悪いかは弁えているが、良ければそれこそ話は尽きずに花が咲くというものだ。

後宮専用の備品や雑貨を取りまとめて扱っている部署は、皇妃を始め側妃達の侍女が集う為に話題は事欠かない。

「あら、スーイ。久し振りね」

「エリーこそ、久し振りじゃない」

「新人が入ってきてたから、そっちに仕事回してたのよ。スーイは、アンネツタ様のお茶かしら」

「よくお分かりで。エリーは？」

「私は皇妃様のお使いで、ご実家から届けられた荷物を取りに来たの」

皇妃と側妃達の仲が良い事から、侍女達もそれぞれ仲が良い。

皇妃の侍女であるエリーも、二の側妃の侍女であるスーイもいがみ合う必要がないので、こうして顔を合わせれば笑みを浮かべてちよつとした近況を報告しあう。

窓口の者にそれぞれ用件を伝えた二人は、窓口から邪魔にならない少し離れた場所へと移動をする。

「アンネツタ様にお茶が届いたという事は、そろそろお茶会が開かれるのかしら」

「多分ね。ほら、ウチの皇子様とスステイ国の王子様は仲が良いでしょ？ 互いに行き来しているほど懇意という事もあって、あちらの王妃様が良質なお茶を贈ってくださるのよ」

「スステイ国も大きな国なのに、案外マメよね？ でも、スステイ産のお茶なんて安い物でも庶民にとっては高値だし、王妃様が贈って下さるのであれば最高級品でしょ？ それを惜しみなく私達にも

分けて下さるのだからアンネツタ様々よね」

「本当にね」

近々開かれるであろうお茶会に期待が膨らみ、笑みを交わす二人であった。

「そういえば、アテリーズ様はお元気？ 言葉を喋られるのが早かったのに、あまりお喋りされないと聞いたのだけど、ご病気か何かなの？」

「ああ、それがねえ……ルードグ侯爵の件から少しお喋りされるようにはなつただけど……」

スーイの問いに、エリーが頬に手を添えながら悩ましげに吐息を零す。

「なつただのだけど？」

「うーん。ほら、お喋りできるようになつたといつても、アテリーズ様はまだ幼いでしょ？ ちゃんとした言葉はまだ無理みたいで……それがね！ 聞いてくれる？ 本当に本当に！ アテリーズ様つたら可愛いのよう！」

それまで困つたような表情を浮かべていたエリーが、急にテンションを上げて詰め寄ってくるのでスーイは思わずたじろぐ。

「う、うん？ アテリーズ様は確かに可愛くてらっしやるけど……」

「以前、初めて皇妃様を『お母様』とお呼びになられたんだけどね？ 舌足らずでどうしても『オカアシヤマ』になつてしまうのよ。

まだ、サが上手く発音できないでらっしやるのね。一生懸命、サと言おうとするたびに、段々と眉を寄せられていくのが本当に可愛くつてー！」

「それは確かに可愛らしいわねえ」

納得とばかりにスーイも笑みを零して頷いてみせる。

「でしょ？ 『オカ……オカ……オカツ……』とか仰りながら、皇妃様を必死に見つめてる姿がもっ！ しかも！ 結局、サが言えなくて『シヤマ』とかになつてしまふ時の泣きそうな困つたようなお顔ときたら、もう胸がキュンキュンしちゃうのようー！」

「まだ幼くてらっしゃるから仕方ないとは言え、それはかなり威力が大きいわね」

思い出して身悶えるエリーの様子を笑いつつ、スーイも是非に見たいとはしゃぎだす。

「なんだけどー。そのお姿が余りに可愛らしくて、つい微笑ましい気分というか、うっかり皆で吹き出しちゃったのよね。それ以来、喋らなくなっちゃったのよ」

それまでのテンションが一気に落ちたエリーが肩を落として溜息を零す。

「あらら」

「でも、皆が吹き出した時、アテリーズ様がびっくりされたご様子で私達を見てね？ 傍から見てても分かるほどお顔を真っ赤にされて、皇妃様の胸に顔を埋めてしまわれたのは堪らなかったわあ。色々々々」

テンションの落ちたエリーをスーイは気遣うように何うが、どこか恍惚とした表情を浮かべているエリーの様子に、呆れた混じりに片側の眉をあげたスーイであった。

「それから皆がいるところでは、滅多にお喋りされなくなってしまうわれたのだけれど、夜にもぞもぞとしてらっしゃるからこっそり様子を伺っているよね、どうやら練習されているようなのよ」

「夜に？ 一人で？」

「そうなの。『オカ、オカ、オカツ……オカツ、オカツって、ラップかよ！』って仰ってたのよね。……ねえ、スーイ。『ラップ』って何かしら？」

「アナタが知らないのに私が知る訳ないじゃない」

真顔で問い掛けてくるエリーに、スーイも意味が分からず小首を傾げる。

暫し、二人であーでもないこーでもない論じていたところへ、それぞれ頼んでいた品が用意されて窓口から呼ばれた。

「それじゃ、またね。そうそう、近い内にスステイ国の王子様がい

らっしやるかも。もしかしたら、アテリーズ様ともご挨拶されるかもよ?」

「そうなの? 分かった。一応、皇妃様にお伝えしておくね。詳しい事はまた改めてアンネツタ様からお話があると思うしね」

「うん、よろしく」

じゃあ、と二人は手を振るとそれぞれの主が待つ部屋へと戻っていく。

そんな侍女達を見送った窓口の男は徐に傍らの用紙とペンを引き寄せメモを取り始める。

「アテリーズ様は未だ幼く、皇妃様を『オカアシヤマ』と呼ばれる……つと。舌を噛んでしまい顔を赤くして恥ずかしがるお姿は、色々と堪らなくなる。確かに堪らんな。後は……『ラップ』なる情報を求む。つてとこかな。そろそろ次の新聞作れそうだな。よしっ」

後宮奥深くに住まわれる三の皇女の逸話が、ここから城下へと流れている事は案外知られていない。

【Snatch】 舞台は大陸の極東

大陸の最も東に位置するララシヤという国は、世界で最小の国と言われている。

実際に有する領土は大きい、四方の内東は海、残る三方は砂漠に囲まれ、その先には岩ばかりの山脈が聳え立つ。

天然の要塞に護られた国と言えば聞こえは良いが、資源の乏しい岩肌の山に、裾野に広がる砂漠も交易には邪魔な存在である。

またもに諸外国と行き来が出来るのは南に面した比較的低い山に作られた街道と、東南の海に設けられた港くらいだ。

拳句、耕作する土地も少ないともなれば、わざわざ領土を狙うほど旨みがあるとも思えない。

事実、ララシヤは諸外国から輸入に頼っている国である。

辛うじて国庫に納める程度には自国での収穫はあるが、輸出するほどのゆとりもなく、また輸出に掛かるコストも厳しい立地で積極的にには行えない。

領土の広さに対し、その半分以下の土地でしか人が住めない為に最小の国と呼ばれている。

そんな資源に乏しいララシヤ国だが、大陸の中では群を抜いて金を持っている国である。

不思議な事に、ララシヤ国の領土には文献にも残っていない遺跡がいくつも存在する。

東の海の中、北側の海底には海竜の巣窟になっている神殿が一つ。

北の砂漠には亜人種のモンスターが跋扈する宮殿が一つ。

西の砂漠には爬虫類のモンスターが溢れている宮殿が一つ。

連なる山間の中にも、西北に悪魔族が往来する寺院が一つ。

西南には鋏角類がひしめく王の墳墓がある。

これらの遺跡はどのような有力者の下に作られたのか、未だまともな文献が見つかってはいない。

しかし、確かなのは一攫千金を狙える宝の宝庫であるという事だ。ララシヤ国が大国と言われる理由、それはこの数々の遺跡を元とした観光資源に他ならない。

物資の資源には乏しい国であるが、数多とある宝が眠る遺跡を見過ごすのは惜しい。

過去に幾度かそう思った諸国の王が侵略を繰り返した事もあった。だが、王都へ辿り着く前にモンスターから執拗に襲われ、壊滅するという散々な結果から、今は侵略を考える国も無いようである。

また、これらの遺跡はララシヤ国の領地にある為、当然ララシヤ国の財産となる訳だが全てを開放している。

遺跡に眠る宝を狙うも自由であれば、遺跡に残る文献を探すのも自由である。

遺跡目当てに訪れる者たちに唯一条件付けているのは、極端な遺跡破壊行為の禁止のみである。

宝物庫の扉を開いたままとは、随分と呑気な国であると思われるかもしれないが理由がある。

他者を除外する為には遺跡に見張りを必要とする訳だが、まずモンスターが蔓延っている為におちおちと他者を見張っている余裕など、人材的にも金銭的にも無い。

次いで、遺跡には幾つかのアーティファクトなる遺物が存在する。現在の技術よりも更に高度な技術によって作られた強力な武器や魔道具であるのだが、持ち手の力が見合わない場合、持ち手の命を削り取って再び元の遺跡へと戻ってくるのである。

アーティファクトの性質を考慮したララシヤ国の幾代か前の王は、国で保管する事よりもトレジャーハンターのリピーターを狙った訳である。

人々は彼の王を、あこぎな守銭奴王と呼んだが、あながち間違っ
てはいなかった。

実際、アーティファクトを目指して訪れるトレジャーハンターは後を絶たず、彼らの落とす金が国を潤しているのだから。

他にも理由は幾つかあるのだが、ここでは割愛しよう。

さて、ここ百年近くは対人による侵略の危惧は遠ざかっているが、時折流れてくるモンスターの被害は常に付きまとっている。

と言っても月に一度、或いは二月に一度ふたつきの割合で二〜三匹が流れてくる程度だ。

だが、モンスター一匹でも村や街が襲われれば容易く全滅させられてしまう力を有している。

そこで登場するのが騎士団である。

ララシヤ国の騎士団は対モンスターに関しては他の国の軍力を遙かに凌ぐ。

時には要請を受けて他国へ赴く事もあるほどだ。

ララシヤ国では軍の上に位置するのが騎士団であり、武力魔力共に優れた寄り抜きの者だけが入れる騎士団は男女問わず憧れの職業である。

深紅の色をした騎士団の制服を纏うのはより武力に優れた者達である。

また、濃紺を纏うのはより魔力に優れた者達である。

騎士団と軍の者は交代制で遺跡に近い村や街へと配属される。

各配属場所のトップは騎士団のリーダーが勤める。

普段は遺跡に向かいモンスター相手に鍛錬する日々であり、時折流れてきたモンスターから村や街を、そして無力な人々を護るのだ。こうして順番に遺跡を巡るように交代で配属され、モンスターの習性を学びながら鍛錬していくのである。

基本、派遣された騎士団と軍の者は、鍛錬で倒したモンスターから素材を採るのは自由であり、また余暇の日に遺跡へ向かいトレジャーハンターと化すのも自由である。

モンスター相手の戦闘方法を徹底的に叩き込まれる為、万が一モンスターへ一人で立ち向かう事となっても生存率は他の冒険者に比

べて格段に上がる。

且つ、危険手当なども破格なので給料も良い。

騎士団所属となると死亡率も少なく、安定した高収入、万が一の保障も充実しているので、ララシャ国の女性にとつては大変お買い得な物件。もとい、結婚したい男性の職業ナンバーワンである。

男性にとつても、女性にモテる。もとい、国が総力挙げて鍛えてくれる上、危険度も冒険者に比べれば少なく、しかも勤務中に倒したモンスターから得る素材で小遣いも稼げ、余暇を利用したアルバイトも自由とくれば、腕に覚えがあるなら挑戦してみようという気にもなる。

但し、勤務中に遺跡の中へと入るのは、救命活動以外では禁止されているが当然の事といえよう。

そんなララシャ国の騎士団は年中無休で人材を募集している。

勿論、希望者全員が騎士団に所属される訳はなく、騎士団に所属されるとも限らない。

初心者や未熟者が入るとまずは軍がその身柄を預かり、適正を測った後に然るべき部署へと配属をさせる。

基礎が出来上がり、多少の応用もこなせると判断されると所属は軍部のまま騎士団見習いとして各遺跡巡りと擲擧されてる地方出張コースが組み込まれるのだ。

一方、トレジャーハンターやモンスターハンターと呼ばれる冒険者が希望してきた場合、実力が伴っていれば直ぐに騎士団見習いに回されて遺跡巡りを行う。

ちなみに、トレジャーハンターは遺跡に眠る宝物を取る事を専門にする者たちであり、モンスターハンターは遺跡の内外にいるモンスターを倒し素材を採る事を主にしている者たちである。

ララシャ国軍、騎士団所属以外の者たちを総じて冒険者と呼び區別をしているのだ。

モンスターとて全てが丸裸で挑んでくる訳ではない。

例えば、亜人種のモンスターであれば強弱は様々だが案外良い武防具を纏っている。

また、少ないながらも宝石や金、マジックアイテムの類を持ち歩いているので、倒した後はそれらを回収して街で売りさばく事も可能であるし、武防具の強化を行う事も可能なのである。

武防具を纏わない獣種、竜種の類であれば、その身から鱗、牙、爪を剥いで武防具を作る素材とする事もできる。

遺跡から得た宝を売りさばく者もいれば、モンスターから得た素材を売りさばく事を生業にしている者もいるし、更には自ら武防具を鍛える為にモンスターを狩る鍛冶職人などもいる。

生死の境は限りなく際どくあるが、それでも夢を追う者は絶えずララシヤ国へと集まるのである。

定期的に派遣される遺跡巡りの一つに西の遺跡があり、一番近いシシーの街に騎士団の詰所がある。

西の砂漠にいるモンスターは足の速い爬虫類型が多く、その為に派出所呼ばわりされている騎士団の詰所が他所に比べて大きい事も有名だ。

砂漠には巨漢と言われるような男でさえも丸のみにしてしまう大きな蛇や、遺跡の近くには知能を有した腕を持つ蛇一族、下半身は蛇でありながら上半身は人間のようにいて牛の頭を持つモンスターなどが徘徊している。

大きな蛇だけであればシシーの街人だけでも応戦は可能なのだが、知能を持つ蛇族や牛の頭を持つ蛇は対抗しきれない。

その蛇の姿をした下半身は、四足の馬を疾走させても振り切れるかどうかという足の速さである。

しかも、知能を持つ蛇はその腕に武器を持ち、狩りを行う戦士や、補助をする呪術士と役割を持って人間を襲う。

一匹一匹を相手にするだけであれば苦勞せずに倒せるのだが、彼らは集団で狩りを行うのだ。

三〜四〇匹で一つの群れとなり行動をしている為、対抗する人間の数が少ない場合は絶滅する確立が非常に高い。

仮に、一つの群れを辛うじて討伐できたとしても、仲間を呼んだのか危機を察知したのか、モンスター素材の採る暇もなく、更に複数の群れが大挙として巣からやってくる有様である。

他、牛の頭を持つ蛇は毒魔法の扱いに優れ、それなりの装備や道具を持っていないと、毒を放たれた次の瞬間には死んでしまつという猛毒さだ。

この西の遺跡は、とにかく面倒なモンスターが多い上に素材を回収しづらいという部分もあって、騎士団の者たちには不人気な詰所である。

その詰所へ、トレジャーハンターであった一人の男が騎士団に入るべくやってきた。

【Snatch】 いらっしやい新人さん

「騎士団への入団をご希望で？ では、こちらの用紙に必要な事項の記入をお願いします」

年中無休で人材を募集しているとは言っても、王都であればざ知らず、地方の詰所の窓口などは暇そのものである。

現に、騎士団入団希望で男が窓口の声に掛けた時も、担当者は暇そうにしていたのだ。

差し出された用紙に男が記入項目を埋めていく様子を、窓口担当の男は暇潰しを兼ねてか覗き込んでいる。

「へえ。ヨリーシャのギルド所属だったんだ？ あそこ、結構腕の良いのが揃ってるって噂のギルドだろ？ 何でまた騎士団への入団を選らんだんだい？ あ、詮索が嫌いだったら喋らなくても良いよ？ ご覧の通り暇だからついつい、ね」

そう悪びれずに笑いながら窓口担当が話しかけてくる。

「いや、構わんよ。ギルドだとちよつと限界を感じてね」

窓口担当の気さくさに釣られたのか、元から砕けた性格なのか入団希望の男は笑いつつも躊躇いなく答えた。

「限界？ えーっと、ベイザーさんね」

窓口担当は男　ベイザーの書く書類から名前を覗き込み、自分が手がける書類の作成も同時に始めていく。

「そう、限界。遺跡の最深部に入れる根性を持つてるヤツと巡り合えねえし、それだけの腕を持っているヤツともなかなかね」

「ああ、成る程。腕は良くても、無理はしないって人多いもんね。かと言って根性だけで最深部に行っても意味は無いしねえ。それじゃ、ベイザーさんはチームを組める人を探しに入団しにきたって訳？」

それまで互いに書類へ目を向けていたが、ベイザーが顔を上げると窓口担当がニヤリとした笑みを向けていた。

思わずベイザーも笑い、書き終えた書類を窓口担当へと渡す。

「ま、そんなとこだ。それと、騎士団はエリートって言われるだけあって、モンスターの捌きがやはり別格だからなあ。その辺の技術も頂きたいと思ってね」

危険と隣り合わせではあるが、安定した高収入の職業として人気があるだけではなく、ベイザーの言う通りモンスター相手の対戦方は冒険者でも流石と唸らせるだけのものがあるのだ。

ララシヤ国では見かけない巨人族の討伐は不慣れにも拘らず、隣国のよしみという事で依頼を受けて早々に片付けてしまった事は有名である。

これを機に他国からモンスター討伐の依頼を受ける事になったのだ。

そういった事情もあり、より己を磨きたいと思う冒険者がベイザーのように入団を希望してくるのである。

「まあ、その辺ウチは自由だからね。……はい、漏れはなしと。一応、入団したら昇進するしないに拘らず五年は退団できないからね。後、細かい規則は配属先で聞く事になるけど、騎士団たる者その名に恥じる行為を行った者は国外退去で一般市民としてでも二度と立ち入りできませんから。それと勤務時間中の遺跡探索行為も禁止ね。配属地とその人を護る事が第一条件だから当然だけど。遺跡探検や素材採りは自由時間で存分にして下さい。素材採りは実習時に許可してくれる事が多いから問題は無いと思うけどね。但し、自由時間中の事故や死亡は騎士団では責任を負いかねますので自己責任でね。保障も半分、場合によっては無しって事もあるから気を付けて下さいねえ。納得、了承できたら、こちらとこちらにサインしてもらえますか？ はい、受理しました。今、案内するからちょっと待って下さいね」

窓口担当が作成した書類とベイザーが書き込んだ書類それぞれにサインをすると、窓口担当がその書類を受け取り続く手続きの為に然るべき場所へと置いた。

それで一つの流れが終わった窓口担当は腰を上げて部屋から出てくる。

「お待ちせしました。これが本日有効の身分証です。では、担当者
の所へ案内しますね。ベイザーさんはヨリーシャのギルドに所属して
ましたし、簡単なテストを行って問題なければ騎士団見習いとして
所属されると思います。当国所属の身柄となりましたら、改めて
騎士団見習いとしての身分証が渡されます。その身分証で当詰所に
あります施設は無料で使えます。但し、その身分証でも武防具に魔
道具、アイテムなど中には無料で支給されない物もありますので頭
の片隅にでも覚えておいて下さい」

冒険者らしく長身でがっちりとした体躯のベイザーよりも頭一つ
低い窓口担当は、慣れた調子でよどみなく説明を続けながら石造り
の廊下を進んでいく。

「テストというのは？」

薄茶の柔らかかそうな癖のある巻き毛がヒョコヒョコと揺れるのを
眺めつつ、ベイザーが切れた言葉の合間を狙って問い掛ける。

「何て事はありません。身体能力がどれ程あるのかを見る為のもの
です。騎士団へ所属されるには、魔術武術共に必要とされるのはご
存知かと思えます。このテストで簡単に魔術に長けているか武術に
長けているかを見ます。良い所は思いつきり伸ばしましょうという
のが、騎士団の方針なので。ベイザーさんはトレジャーハンターだ
つたんですよね？ 魔術の方が得意なのですか？」

ベイザーは窓口担当の肺活量を気にしながら緩く頭を振った。

「いや、俺は最低限の魔術しか取得してない。どちらかと言えば力
で押す方が好きなんでね」

「そうですね。でしたら、武術を更に伸ばしつつ魔術も扱かれると
思います。いずれは身になるものですので頑張ってください。あ、
あちらが食堂です。お酒は用意しておりませんが、年中無休で空い
ておりますし、身分証を提示してもらえれば無料で利用できます。
そして、こちらは武防具の貸し出しを行っております。隣にあるの

はアイテムを扱ってます。武防具は見習いの間は基本貸し出しです。練習中や実習時に壊れた武防具もこちらに預けて貰えれば修理も致しますし、新しい武防具の貸出も行います。配属が決まりましたらサイズを計りますし、得意な獲物もその時に伝えて下さい。後で担当者が案内すると思うので従って下さいね。貸し出しの武防具の修理や消耗品アイテムは身分証の提示で無料で支給となっております。ちなみにアイテムの転売は恥ずべき行為に該当しますので気を付けて下さい。五日稼働で二日が休日となりますが、休日は交代制となっております。最初の内は割り当てられた休日を過ごす事になると思いますが、慣れたら休日の変更も可能ですし、希望があればその様に振り当てるよう考慮も致します。その辺りは様子を見ていれば分かると思います。テストを行った後、見習いとして入団が決まりましたら、本人の希望によって宿舍の提供も行っております。勿論、施設及び消耗品以外の備品は無料での貸し出しです。生活消耗品も先ほどの道具屋で扱っておりますので、身分証を提示すれば街で買うよりかは安く手に入ります。一先ず私からの説明は以上ですが、何か質問はありますか？」

息もつかせぬ一先ずに圧倒されたベイザーはぎこちなく頭を振る。「い、いや。今の所は……」

「了解です。私の肺活量を十分に關心して頂いた所で、引継ぎを紹介しましょう。ガデイー!!」

丁度、説明を終えた所で廊下を抜けて二人が中庭に出ると、そこには安い皮鎧を纏っただけの軽装な男達が木剣を打ち合い練習に勤しんでいた。

窓口担当が片手を上げ、大きな声でベイザーを引き渡す者の名を呼ぶ。

練習する男達から少し離れた場所で見っていた男が一人こちらを向き、笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

明るい銀髪に碧の目をしたガデイーはベイザーとそう背丈が変わらない。

「やあ、テール。そちらは入団希望の方かな」

無骨な雰囲気のあるベイザーとは比べ、柔和な風貌に浮かべるガデイの笑みは女受けが良さそうである。

窓口担当の名はテールと言っらしい。

ガデイの呼びかけに頷いたテールはベイザーを紹介しつつ、先ほど仕上げた書類を渡す。

「そうだよ。入団希望者。ヨリーシャに所属していたベイザーさん。トレハンメインで、魔術よりも武術が得意なんだって。判定済んだらこっちに寄越して。身分証とか渡すから。じゃ、後は頼んだよ？」
テールはガデイにそう告げると返事も聞かず、ベイザーにウィンク一つ送って去っていった。

絶えず笑顔であったテールは、冒険者や騎士団の連中から比べると細身な体躯という事もあり、一見ひ弱なイメージなのだが、短い距離であったがまるつきり隙が無かった。

主に言葉を挟むという点ではあるが。

「どこでサボってるのかと思ったら窓口にいたのか……盲点だったな」

共に見送るガデイの言葉に不思議そうな眼差しを向けたベイザーだったが、視線を受けたガデイは笑っている。

「驚いたろ？ アイツが一旦口を開くと閉じるのに時間掛かるから、質問する時はよくよく考えてからすると良いよ」

「……のようだな」

「さて……ベイザーさんだっけ。俺はガデイ。ここの責任者で、新入りのテスト担当と諸々の面倒を見ているから、暫く顔をつき合わす事になるけど宜しく。早速だけど、まずは体力測定と持久力を計らせてもらっな。トレハンだったんだよなあ。最高記録は？」

テールから受け取った書類から顔を上げたガデイが問い掛ける。
気になる事はあったが、今はガデイの問いに答える方が先決である。

「西北の寺院で上は三階の宝物庫、地下は二階の墓まで。海の神殿

は大広間までが限界だったな」

「お。あそこの墓まで行ったのか。こここの宮殿は？」

「一階の大広間に、二階の王妃の間、地下は様子見だけで土産は無し。奥庭にある古代竜の巣までだな」

「上等、上等。魔術最低限で、そこまで良く行けたもんだ。地下はオフデイアンの巣だから様子見だけでも大したモンだよ。海の神殿だって、凄腕の連中だってそうそう行けないしな。んじゃ、取り合えずは木剣で持久力見せてもらおうか。ただの打ち合いだからダルいかもしれんが辛抱してやってくれ」

そしてベイザーは単調であるが、筋肉をかなり駆使させられるテストを受けたのである。

【Snatch】 武器はヌイグルミです

「流石、流石。申告通りに魔術は最低ラインだけど、力の水準は高いね。持久力も第一線張るには十分だし。もう少し魔術の扱いに長ければ即戦力で使えるな。一応、武術部隊所属で魔術部隊で修行つてとこな。武術もまだ荒い部分が残ってるからその辺の調整も欲しいところだし……ラルス隊長が戻られたら引き合わせるよ。ご苦労さん」

思いのほか良い成績を出したベイザーにほくほくとした表情でガデイが告げる。

へばりきつて地面に大の字となっていたベイザーが、合格の言葉に漸く体を起こした時であった。

「貴様！！俺の邪魔をするのかつ！！」

響く怒声中庭にいた全ての者が動きを止めて声を発した者へと目を向けた。

ベイザーが怒声を上げた者を見れば、皆が傷を受けてもよい安い皮鎧を纏っている中で、恐らく私物であろう豪華な細工を施した皮鎧を纏っている。

本来の鎧は重厚に、そして頑丈に作られる事はあっても、実践用の鎧で華美に作る事はない。

しかし、防具を華美に施す事が貴族の間では往々にしてある。

財力の誇示であり、何者にも傷付けられないという力の誇示であるが、実にくだらなない考えだとベイザーは思う。

何もベイザーだけに限らず冒険者から見れば嘲笑してしまう考えだが、貴族は真面目にそう思っている節があり、無駄に金を掛けて派手な武防具を着たがる。

皮鎧とはいえ無駄な装飾を見るにこの栗毛の男は貴族なのである。うとベイザーも見当がついた。

白い肌を怒りに紅潮させ、濃い色をした栗毛の男が手にしていた

練習用の木剣を、黒髪の少年に突き付けていた。

傍から見ても怒りに満ちた栗毛の男に対し、十五、六と年若い円らな瞳をした黒髪の少年はあからさまに面倒そうな表情で髪を掻いている。

大陸では余り見かけない彫の浅い面立ちをしている。

幾らこの場が騎士団見習いの新人で埋め尽くされているとはいえ、モンスターを相手にする仕事なのだ。

それなりに屈強な体を自慢に思う者が殆どであろう。

それらに比べて腕も足も体も薄く細い少年は、どう見てもこの場には相応しくない。

下卑た者ならお譲ちゃんとからかいそうである。

「あの馬鹿……触るなど言っておいたのに。ベイザーさん、ごめん。ちよつと待ってて」

馬鹿とはどちらに對しての言葉なのか。

そう言うや否や、ガディはベイザーをその場に置いて栗毛の男と黒髪の少年の下へと向かった。

栗毛の男の後ろには、片腕を押さえて蹲っている男がいる。

「邪魔つて言ってもさあ。これは練習であつて、身内潰すようじゃ意味なくね？　つて言つてんだけど。ちよつと、その人。彼、医務室連れてつてやつてよ」

黒髪の少年が周りを囲んでいる一人に声を掛けるが、栗毛の男は声を荒げて遮る。

「余計な事をするな！　大体これしきの事で倒れるなど騎士として呼べるか！　この様な者を騎士として取り立てるララシャ国の考えを疑つわ！　お前など恥を知つて土でも弄つていれば良いのだ！」

蹲る男へ吐き捨てるように言う栗毛の男にベイザーは眉を潜める。暫く様子を伺っていたが、遣り取りを聞く内に合点がいった。

少々というよりかなり腕に自信を持っていた栗毛の男は、平民である練習相手を馬鹿にして容赦なく打ち込んだのであろう。

或いは自分の実力には及ばない平民相手と打ち合う練習に腹を立

てたか。

木剣とは言え、力の限り叩き付ければ骨も折れるし、打ち所悪ければ容易くも死ぬ。

その場を取り囲む男達も栗毛の男の物言いに眉を潜め、徒ならぬ空気が満ちてくる。

中には上位階級の者もいるかもしれないが、殆どの者は平民なのだから不穏な空気となるのも当然と言えた。

貴族だからと全てがこの栗毛の男のように鼻持ちならない訳ではないのだが、こういう態度を取られるとやはり偏見が生まれるものである。

「いやいや、護るのが騎士ってヤツじゃね？ 無駄に突っ掛かるだけなのは、単なる馬鹿なんだと思うんだけど」

激する栗毛の男に対して緊張感の欠片も見せない少年の言葉に、誰かが思わず「そりゃそうだ」と笑いを漏らす。

その笑いに激昂した栗毛の男が突き付けていた剣を振り上げ、ベイザーを始めその場に居た者に緊張が走る。

が、ガデイが何とか少年との間に割り込んだ。

「おい！ 揉め事を起こすなと言っただろうが。それに、この子には拘るなど言っただはすぞ！ そのお前、この者を医務室に」

ガデイが手近な場所にいた男へ促し、腕を押さえている男を連れていかせる。

「邪魔をしたのはコイツだ！ 大体、その口の利き方はなんだ！

俺は

「お前がどこの国の貴族であろうと、この場では意味が無い。今のお前はただの一新人だ。他人を扱く暇があるなら、自分を鍛えろ！」
「扱きじゃなくて、イジメ」

ガデイが栗毛の男を一喝する背後から、黒髪の少年が余計な一言を言う。

「アナタは黙ってて下さい！ 大体、何でココにいるんですか！！」

「え、面倒だから？ それに、ラルスとリヴォールがいつてんだか

ら、手は足りるでしょ」

振り返り怒鳴るガデイに黒髪の少年が飄々と答える。
何かしらの葛藤があったのだろう。

ガデイが頭を抱え、声にならない様子で激しく苦悩を表現しているのがベイザーにも見れた。

しかし、今この場に來たばかりのベイザーもであるが、その場にいた男達も内心不思議で仕方が無い。

この詰所での最高責任者はガデイである。

その肩には騎士団魔術部隊の印である濃紺色をしたリボンの臂章ひしちゆうがついている。

正確な階位は分からないが、こうして派遣されているガデイもエリートと呼ばれる一人である事は間違いないのだ。

そのガデイが、言葉は悪いながらも少年を立てる態度を取っているのだ。

この少年が何者であるのか、誰しもが気になる所ではあった。

「……ガデイ殿。その小僧とてこの場にいる以上、騎士団の端くれなのであるう？　ならば、ぜひともその腕前を見せてもらいたいのだが？」

ガデイへ告げる栗毛の男の言葉は謙っては見せるが、態度はあからさまである。

面倒この上ないとばかりに溜息をついたガデイは黒髪の少年に目を向ける。

「手、出したんですから自分で片付けて下さいよ」

「えー？　面倒臭えなあ……ヤっちゃっていいの？」

「駄目です！！」

「更に面倒臭え。何でこんな相手にしなきゃならんのだよ」

「リヴォールさん達と一緒に行かなかったからでしょうが」

「あつちらはもつと面倒なんだもん……それに、俺行つたって役立たないしなあ」

貴族らしく華美な装いをしているが、栗毛の男は自信を伴うだけ

の技量があるようにベイザーの目に見える。

そんな栗毛の男をまるで意に介していない黒髪の少年の態度や言葉は、尚更に栗毛の男を苛立たせていた。

案の定、業を煮やして男が怒鳴る。

「つべこべ言わずにさっさと武器を構えろ！」

「……はあ、面倒臭っ……」

ちらりと見やった黒髪の少年が溜息混じりに掌を返す。

魔術によって、少年がもつとも使いやすい獲物を取り出したのだ。詠唱も無い魔術にベイザーが思わず息を飲む。

が、その手に現れた獲物を見て、ガデイ以外の者が、ベイザーだけではなく栗毛の男も、そしてその場を見守っていた男たちも驚愕する。

いや、唾然としたというべきであろうか。

少年の手にあるのは、どう見てもヌイグルミであったのだから。

【Snatch】 恐怖は隣にいました

誰よりも早く我に返ったのは栗毛の男だった。

「こ、小僧おおっ！！ 馬鹿にしているのか！」

先よりも更に顔を赤くし、吼える栗毛の男に対して少年は軽く肩を竦めてみせた。

「馬鹿になんてしてないんだけど、これっくらいしか丁度良いのないんだよねえ」

少年が手にした豚を模したヌイグルミはしつかりとした生地で作られているタイプではなく、それは柔らかな布地で出来ているのが容易に伺えた。

例えるなら、女性の下着に用いられるような薄くて柔らかな生地である。

ピンク色の豚はとてもよく膨らんでおり、カ一杯という訳ではなさそうだが、少年の握力で軽く掴んでいる足がかなり搾られている様子からも、中に詰められた綿は柔らかさそうなのが分かる。

あのようなヌイグルミで叩かれても痛くも痒くもなさそうだ。

自分の相手の武器がアレであつたら怒るだろう……そう思つてベイズーであつたが、栗毛の男は当然であるが憤怒の形相である。

一方ガディは投げやりな調子で狭まっていた人の輪を広げて回っている。

「ああ、ベイズー。本当にすまないが、事が済むまでちょっと待っててくれ」

つい近寄っていたベイズーの元まで回ってきたガディが申し訳なさそうに詫びてくる。

「いや、それは構わないのだが……あの子供は大丈夫なのか？」
ベイズーの問いは当然である。

戸惑う表情を浮かべてるベイズーに答えるガディを遮り第三者の声割り込んだ。

「医務室に怪我人が運ばれてきたと思ったら一体何の騒ぎな訳？
あの人が何してんの？ ああ、あの馬鹿貴族の息子が元凶？ 面倒臭
がりの癖に、よくよく厄介な事に首突っ込んでるよねえ、あの人」
ベイザーが声のした方を見れば、受付担当のテールが面白そうな
表情を浮かべ、腕を組み隣に立っている。

しかも問い掛けていながら自己完結している。

何も言えずにいたベイザーがガデイを見ると、肩を落として頭を
振っている所であった。

「今度は医務室でサボってたのか。で、新入りの怪我はどうだ？」

「窓口の係りが戻ってきたからねえ。あの程度、直ぐに治したよ。

今日一日ゆっくり寝れば、明日は元気さ」

サボりで受付窓口とは？ と疑問に思いつつも医療魔術もこなせ
るのかとベイザーが感心した眼差しでテールを見ていると、それに
気付いたテールがクリクリとした目を楽しげに輝かせる。

「これでも、騎士団の一員だからね」

「えっ？」

「え？」

驚きに声を上げたベイザーを笑いながらテールが真似る。

「合格したんだろ？ ベイザーも医療魔術くらい出来るようになって
もらうから頑張ってね」

「それよりテール。何であの人、残ってんだよ。ラルス隊長が引っ
張っていったんじゃないのか？」

ベイザーをからかうテールにガデイが声を掛ける。

「あの方が大人しく付いて行く訳ないじゃん。さっさとトンスラし
てたけど？ それにあの人行ったら練習にならないでしょ。何せ、
片っ端から逃げられちゃうんだから。その辺は、ラルス隊長もリヴ
オール隊長も承知なんですよ……とは言っても西の宮殿は逃げる連
中は比較的少ないけどね。帰ってきたら怒られるんじゃないかなあ」
ハツハツハツとテールが軽快に笑う。

「所で賭けない？ あの馬鹿貴族がどれくらい持つか。俺一発でダ

ウン」

「賭けにならないじゃないか」

己よりも背の高いガディの肩に片肘を乗せながら、テールが悪戯めいた笑みを浮かべるも、ガディの返事には唇を尖らせる事で不満を表す。

「あの子供、そんなに強いのか？」

二人の遣り取りに目を見張り、ベイザーが少年へと目を向ける。

色々と呼んでいた栗毛の男は堪えきれなくなったのだろう。

剣を掲げて少年へと怒りのままに突進していく所であった。

周りにいた男たちも息をも忘れて見入っている。

突進してくる栗毛の男に反して、少年は何気ない動作で片足を浮かせた。

「そりゃあ、強いよ。だって、あの人はこの騎士団の団長だもの」

両手で又イグルミの足を持ち、右肩を後方へ下げのように軽く上体を捻る。

「はっ?!」

場にそぐわない軽い調子で告げるテールに思わずベイザーが振り返る。

近くにいた男たちも咄嗟にテールへ視線を向けた。

慌ててベイザーが視線を戻せば、間合いを詰めた栗毛の男が剣を振り下ろすよりも先に、少年は極々軽い勢いで又イグルミをスイングさせた所であった。

「……!!……!!……!!」

柔らかく打ち返すかのような、そんな軽い勢いであったにも拘らず、栗毛の男は吹っ飛んで行った。

自分の背丈の倍以上に飛んでいった栗毛の男は、ガディが広げた人の輪の中へ突っ込みそうな勢いであった。

「な……………」

言葉が無いとは正にこの事だろうか。

誰しもが何も発する事ができずに、地面へ突っ伏したままの男を

見つめる。

「相変わらず、デタラメな人だなあ。アレ以上、力を弱められないっていうんだから滅茶苦茶だと思わない？ それなのに、片っ端から動物に避けられるとか逃げられるとか、一人じゃ馬にも乗れないとか、団長つてば凄えウケるーっ！」

静まりかえった中、一人ウケているのはテールのみである。

「うるせーっ！」

顔を赤くした少年がこちらに向かって叫ぶ中、ガデイが栗毛の男の傍へと向かっていた。

「誰か、こいつ医務室運ぶの手伝ってくれ。テール、診てやれよ」

「面倒だから嫌だ。大丈夫だよ、一過性の脳震盪だから時間経てば勝手に覚めるって！」

「そんな遠くから見て判断すんな！」

テールの返事に怒鳴り返したガデイの表情が恐怖の色で固まった。「あ……」

それまで軽薄とも思えるようなテールの声に脅えが混じる。

怪訝と隣を見れば、笑みの表情を浮かべたまま固まっているテールの肩に手を置く麗人の姿があった。

一言、美しい女性である。

しかし、寄らば斬るとばかりの雰囲気を持つ女性は、邪まな思いを持たずとも相手に緊張を強いる、鋭利な刃を首筋に当てられるような錯覚を覚える、凛々しくも研ぎ澄まされた雰囲気的女性だ。

ちらりとベイザーが全身に目を走らせると、銀の甲冑の上からでも胸の膨らみは豊かであると易く分かる形に、絶妙なラインが腰を引き締めている。

傍らの麗人の美しさに魅入られた者が、彼女の体を何者からも護り、そして彼女の美しさを一片と曇らせる事のない、精魂削って作り上げたかのような甲冑を纏った美しい女性である。

腰まで伸びた金の髪は艶を帯び、娘によっては春を思い起こさせる薄い碧の目を細めた笑みになぜか背筋が寒くなりだしたベイザー

であった。

本能からぎこちなく視線を少年に戻すと、テールと同じように固まっている。

但し、背後に立ち少年の肩に手を置いているのは、甘い容貌のガデイを更に凌駕する甘さの男であった。

女に騒がれるだろうと、半ば妬む気持ちを抱かせるガデイの容貌であったが、ベイザーはそんな思いを抱いた事をガデイに心底謝りたい気分になった。

細身にも見える均整の取れた体躯を持つ男は、炎のように赤い髪を後方へと撫でつけ、青い目を細めて笑みを浮かべている。

ベイザーは開いた口が塞がらなかった。

しかし、それはベイザーだけではない。

その場にいた新人全員が思った事である。

フェロモン過多で垂れ流し過ぎだろう

と。

【Liggtagard】土曜を逃げる！（前書き）

魚 ピンときたらホコッ！

【Lightard】土曜を逃げる！

かつて、禍々しき力で思うがままに『ライトアード』の世界を支配していた邪悪なる者は、立ち上がった勇者により倒される。

砕けた邪悪なる者の身は世界各地へと飛び散り、あたかも平和が訪れたように思えた。

しかし、邪悪なる者の力までは消え去ることはなく、飛び散った欠片に残されていた。

時は流れ、再び悪しき力を満たした欠片は『ライトアード』の世界を分かつ。

飛び散った欠片の数だけ世界は分かれ、平和な世界、悪行蔓延る世界、止まることなく繰り返される戦乱の世界とさまざまな平行世界が誕生した。

それが、仮想現実多人数同時参加型オンラインロールプレイングゲーム（VRMMORPG）『ライトアードオンライン』である。

瑞々しい萌黄色をした草原は吹き抜ける風に煽られ、反射する光が波のように繰り返して流れている。

仕事を終えたあと、この場所で一心地つくのがここ最近『彼』の習慣である。

視界が届く見渡す限りの草原は彼が所有するエリアだ。

頬を撫でる風、草や土の匂いもとてもリアルに感じるが全てはバーチャルである。

一時間ごとに昼夜が入れ替わり、三時間ごとに乾期と雨期が巡ってくる。

先ほど雨期が過ぎて乾期となった今、彼は草の上に寝そべり空を仰ぎ見ている。

吹き抜ける風で揺れた草が頬を撫り、吸い込む空気も清々しく彼は自然と笑みを浮かべながらうつとりと瞼を閉じた。

作れるキャラクターは人間を始め、ファンタジーな人種やモンスター種と多岐に渡る上、容姿や体型、肌の色に声と数え切れないパーツから選ぶことによって限りなくオリジナルなキャラを組み立てられるのも人気の一つだ。

スキルも多種多様に溢れ、冒険者として極める物から何の役に立つのか分からない無駄な物まで揃っている。

一つのアカウントで五人のキャラクターを作る事が可能であり、条件付けされてはいるがログインログオフの必要なくキャラを代えられる利点もある。

今の『彼』グラントマスター phamima.comはグラスというスキルを極めたGMだ。

幾つかある無駄スキルの一つに上げられている。

何のスキルかといえば、単に牧草を育てるスキルである。

但し、GMが育てればマジック効果が付き、毒スキルが備えていれば毒草も作ることが可能である。

しかし、NPCのショップでも効果はかなり下がるが同様な物を購入できることと、地味で時間の掛かるスキル上げ、広大な土地が必要であることや、極めたあとにも牧草地の管理が大変など、掛けた労力と得られる利益が伴わないためにスキルを極める者は限りなく少ない。

世界各国でプレイをされているゲームであるが、グラスGMは二桁いるかないかであろう。

正に趣味のためだけに存在するスキルである。

そんな無駄スキルを長時間やり込んで極めた一人が phamima . com である。

彼の周りには、彼と同じように変わった趣味の人間が集まっている。

類は友を呼ぶとはこのことだろう。

phamima . com 牧場に友人の一人が訪れた。

牧場へ自由に出入りできるようフレンド登録されたこの友人、
「又ルツポさん」も無駄スキルを極めた変人である。

ちなみに「さん」までが名前であるため、正しくは又ルツポさん
さんだ。

「やあやあ！ phamima . com 君、お邪魔しますよー！」
phamima . com に気付いた又ルツポさんが手を振りながら近づいてくる。

又ルツポさん^{プレイヤー}PLの性別は不明であるが、キャラクターは萌え要素が大きい幼女エルフである。

ピンクの髪に大きな目と尖がった耳、白い肌に小柄な体、声もア
ニメボイスと徹底している。

十中八九、PLは男だろうと phamima . com は予想しているが
あえて尋ねたことはない。

又ルツポさんは外国シャードでも遊んでおり、色々と貢いで貰っ
ているようである。

また又ルツポさん逢いたさに外国シャードから日本シャードへや
つてくる外国人男性もいる。

日本人は自分の性別にこだわらずキャラを作成するために男性が
女性キャラで、女性が男性キャラで遊ぶことは往々にある。

だが、外国人は自分の性別と同じ性別のキャラを作る傾向にある
ため、性別が逆であるという可能性に思い至らない。

又ルツポさんの気を惹こうと一生懸命な外国人PLを、生温い思
いで見つめる日本人PL達であるが、事實は知らないほうが幸せと
いうこともあり、誰も彼に又ルツポさんの正体については教えてい

ない。

phamima.comは寝そべっていた上体を起こし、手を振り返して応えた。

ヌルツポさんは牧羊スキルを極めた変人である。

どのようなスキルかといえば、牧羊する動物やモンスターを指定した場所へ移動できる「だけ」のスキルである。

グラススキルにはまだ実用性があるものの、牧羊スキルは極めるのも大変な上、実用性さえもないスキルであり趣味以外の何物でもない。

しかも、牧羊スキルを使用する際には牧羊の杖が必要となるのだが、指定された過酷なクエストをクリアしなければ得られないレアアイテムであるアーデルハイトの杖まで所持している徹底振りだ。

但し、ヌルツポさん本人がクエストをクリアしたかは謎である。

この牧羊スキル以外にもヌルツポさんは動物やモンスターを従える調教スキルや、配合や掛け合わせができる飼育スキルも持ち合わせている。

野生の動物やモンスターをペットとして手懐けるのが調教スキルであり、騎乗ができたり戦闘に参加させたり、訓練をさせて鍛えることも可能だ。

ペットステータスを最高値まで上げれば高値でも売れる。

また、飼育スキルはペットとなった動物やモンスターを掛け合わせ、更に新たなペットを作れるスキルであるため、調教スキルの訓練次第では立派な戦力にもなることから、合わせて極める者も多く実用性を鑑みても人気の高いスキルである。

現在、ヌルツポさんが手がけているペットは、現代シニールリアリズムの鬼才がデザインした某異星生物映画によく似たモンスターである。

ボディは黒く、ヌラヌラテラテラしているが、一応騎乗は可能なモンスターだ。

ヌルツポさんは幼女エルフなので一メートルそこそこの身長なの

だが、ペットは長い尾を含めると二メートルは超える。

二足歩行も可能なペットは、目視できる範囲で百匹くらいいるだろうか。

調教スキルでペットを従えることは可能であるが制限数が課せられている反面、牧羊スキルはペットへの命令ができない代わりに制限数が設けられていない。

そのため、何匹でも引き連れて歩くことが可能なのである。

二メートルを超える黒くテカったグロテスクな存在を推定百匹引き連れてご機嫌な萌え幼女。

正直グロテスクである。

心のオアシスである長閑で牧歌的な `phamima.com` 牧場はたちまちホラーな世界に様変わりをした。

「ヌルツポさん、ソレを連れてくるのは勘弁してって言ったじゃないですかあ」

「ごめんごめん。でも、`phamima.com` 牧場の草が一番なんだもーん。毒草食べさせたいんだけどできあがってる？」

えへへ、と笑うヌルツポさんの後ろでギシャーギシャーと輪唱する異星生物は可愛げもなければ喧しいことこの上ない。

`phamima.com` は溜息を零しながら立ち上がる。

「別の場所に作りましたから、そっちも登録しておきますよ。勝手に利用していいですから」

「え、また土地買ったの？ `phamima.com` 君ってどんだけ土地持ってるの？」

「たくさんです」

「なんだ、それ」

ヌルツポさんが `phamima.com` のとぼけた答えにケラケラと笑う。

「ソレ、ゲート潜れませんかよ。徒歩で行きますか。キャラ変えるんでちょっと待ってて下さい」

「ういっい」

この phamima.com 牧場は犯罪者が蔓延る世界『レサノ、PLへの攻撃や殺人、窃盗といったネガティブな干渉が許されている場所にあるため、私有するエリアから一步外へ出れば危険が満ち溢れている。

例え見た目がグロテスクであろうとも推定百匹連れていようと、戦闘能力ゼロであるため役には立たず、ヌルツポさんも現在は牧羊スキルがメインなので戦闘は期待できない。

そのため、phamima.comは魔法剣士のスキルを持ったキャラへと切り替えたのである。

「お待たせです。そうそう、PKギルドプレイヤーキラが近所に引越してきたんですよ。気をつけて下さいね」

「りようか〜い。田楽さんとTechmageさんが暇だからきてくれるって」

「それは心強いですね」

彼らは国内で三番目に作られた日本シャードの一つ『弥生』で活動する名うてのPKギルド『呑助』のメンバーである。

毒草牧場への移動から少し目的がずれそうではあるが、それはそれでまた楽しめることだろう。

戦闘用のマクロはいつでも使用可能だ。

メンバーと合流し、最強の武器と防具を纏った彼らは次回の呑兵衛横丁はどこでやるうかと話ながら牧場を後にした。

【Lightard】土曜を逃げる！（後書き）

マクロ

複数の動作をひとつのキーにて一連で動作させること

PL・プレイヤー

遊び手

PC・プレイヤーキャラクター

遊び手が作成したキャラクター

NPC・ノンプレイヤーキャラクター

システムが動かしているキャラクター

PK・プレイヤーキラー

遊び手のキャラクターに攻撃を仕掛ける人

キャラを殺害しアイテムや所持金を奪う

PKK・プレイヤーキラーキラー

PKを行うキャラを専門に攻撃を仕掛ける人

自警団

【DICTIONROID】爬虫類図鑑(前書き)

図鑑はディクショナリーじゃないけど気にしない

【DICTIONROID】爬虫類図鑑

夏休みの課題を一生懸命やっているボクの横には、人型をした爬虫類図鑑のデイクシヨロイドが待機している。

最近流行っているこのデイクシヨロイドは、去年のクリスマスにパパが買ってくれた。

オオトカゲの生態を調べ、不思議に思ったこと、感じたことをまとめてデータで提出しなくてはいけない。

課題の内容は自由に決めていいって先生が言っていたから、僕は好きなオオトカゲを選んでみた。

「オオ……トカゲは、種類も多く……大きいモノだと……えっと……五メー……」

打ち込みに集中していたボクの頭を、デイクシヨロイドが叩いた。
「四七五センチ」

「……………」
振り返ると勢いよく伸ばしたデイクシヨロイドの舌が、口の中へ戻っていくところだった。

背とか見た目は小学四年生のボクと同じくらいで、パパはボクと似てるからって言ってたけど、ボクはこんな生意気な顔をしていないと思う。

図鑑に載っている爬虫類の特徴をコピーできるっていうのが図鑑シリーズの特徴で、コイツは今みたいにカメレオンの舌をコピーしてボクの頭を叩くんだ。

「舌で叩かないでよー。口で言えばいいじゃないか」
文句を言ったら、トカゲみたいに先の割れた舌を突き出してチラチラしてみせる。

爬虫類図鑑のデイクシヨロイドは何だか生意気だ。

この間だって、学校から帰ってきたら肌の色をやドクガエルみたいに黄色と黒にしてボクを驚かせるし。

ヤドクガエルの大きさならボクだつてびつくりしないけど、黄色と黒の肌をした人が自分の部屋にいたら誰だつて驚くよ。

しかもコイツは腰を抜かしたボクを指差して笑つてたんだ。

辞書だから、コピーできるとはいつても毒の機能まではコピーできないから危なくはないけどさ。

ムカつきながら、ボクは画面に向き直ると続きを打ち込みはじめる。

「ラフネックモニターの格好よさとか、可愛さは……神……」

さつきよりも強く頭を叩かれた。カメレオンの舌で。バシッて。

「レポートに神とか使つな」

取っ組み合いの喧嘩になってママに叱られた。

小学六年生になったボクは、新しく国語辞典のデイクシヨロイドを買ってもらった。

斜め向かいに住むお姉ちゃんみたく中学生つて雰囲気で、肩まで伸びた黒い髪がサラサラしてて眼鏡をかけてるから頭良さそうに見える。

学級委員長とか似合いそうな感じ。

ママは今買いい物に出かけてて居ないから、早速意味を調べてみることにした。

勿論、調べる単語は決まっている。

エッチな単語だ。

アレコレ言ってみただけど、デイクシヨロイドは顔を赤らめてモジモジするだけで意味を教えてください。

バグってるのかな。

「じゃあ、キスは？」

「鱈。スズキ目キス科の海水魚。沿岸の砂泥底にすむ。全長約三〇センチ。体は細長……」

「スキップ」

魚のキスを調べたい訳じゃないから次の項目へ飛ばす。

そうしたら、デイクシヨロイドがいきなり胸の前で祈るように指を組み合わせ、瞼を閉じてちよつとだけ顔を上向けたりするからドキツとした。

簡単な動作もしてくれて意味を分かり易くしてくれるというのが特徴なんだけど、このデイクシヨロイドってちよつと可愛いんだよね。

「接吻、口付け」

「リ、リピート」

「接吻、口付け」

声も可愛い。

ドキドキしながらディクシヨロイドの肩にそつと手を乗せて顔を寄せてみた。

「……………お前、何やってんの？」

ドアのところに凭れて腕を組んでるお兄ちゃんが呆れた顔でボクを見ていた。

「っ……………うわああああああつ！ ド、ドア！ ノックしてよっ！」

「いやいや、開けっ放しにしててノックも何もないだろうが」

お兄ちゃんに見られた！ 人生最大の汚点だつ！

恥ずかしくて身体がカツカツしてくる。

「まあ、誰しもが通る道っつーか……………あ、そのディクシヨロイドってさ、検索できる単語に制限があつて、何調べたのか親がチエツクできる機能ついてるんじゃないかなかつたっけ？ ほどほどにしとけよ？」
お兄ちゃんはニヤリと笑ってそう言うつと自分の部屋へ戻っていった。

呆然としていたボクだけど、慌ててディクシヨロイドの手を引っ張つてお兄ちゃんの部屋へと駆け込む。

「お兄ちゃん！ 検索の初期化方法教えてーっ！！ ママに怒られちゃっーっ！！」

コンビニDSZ

ここ、遊鈴坂下という名の交差点は、色々と噂の絶えない場所である。

坂下とあるのももちろんその上には緩やかな坂が続いており、交差する二本の道も片道二車線と十分な幅があり、けっして見通しが悪いわけではないのに事故が耐えない。

四つ角を占める住居も交差点から一番遠くに玄関を設け、交差点側は堅硬な壁で突っ込んでくる車を予期しているかのような作りである。

夜にはざんばら髪の落ち武者が、白いワンピースを着た女が、果ては新幹線よりも早い老婆が走っているのを見かけたと、嘘か真かその手の噂が跡を絶たない。

そんな遊鈴坂下の交差点の角の一つには、個人が経営している二十四時間営業のコンビニがある。

その名もポイントチャールズというコンビニは、九人の社員がシフト制で詰めており、さらにバイトが数名入っているのだが、夜のバイトは常に募集が掛けられ、千五百円という破格な値段がつけられている。

まことしやかな噂を裏付けるような時給である。

そもそも、遊鈴坂下は都会からも幹線道路からも外れ、夜通し営業をしていて人が入るのか甚だ不思議な場所なのだ。

節電営業が当たり前となりつつ昨今、ポイントチャールズは看板の照明は落としながらも店内は煌々として今夜も営業中である。

本日、初めて夜間シフトに当てられた山田哲夫（二九）は社員である林雄三と共にレジへ立ち、一向に訪れる気配のない客を待ち続けていた。

時刻は間もなく丑三つ時である。

こんな時間に来る客も稀であるうちに、なぜか昼時ラッシュを迎えるがごとく棚から溢れんばかりに補充をさせられた。

「……そろそろだな。山田君は今夜が初めてだっけ。君は無心でレジ打ちだけしていればいいから。ただし、挨拶も何も言わなくていい。絶対に口を開いちゃいけないよ?」

「え? なぜですか?」

蔵かに告げる林社員に、新米である山田は驚きの声をあげる。

「うん。その時がくれば分かるけど、たぶん口を開いたらまともにやってられないっていうか……慣れればどうって事もないんだけどさ。あとね、レジは通常に打ってもらうけど、受け取った『お金』はココに投げ入れてね」

そう言っつて小林社員が指したのは、なぜこんなところにと山田が不思議に思っていたポリバケツである。

レジ打ちポジションに立つ山田の背後は、一二〇Lの業務用ポリバケツが十個並んでいた。

「はあ……あの……一体これは……」

「僕からのアドバイスは一つだけ。考えちゃ駄目だ。無心になれ。以上」

「え? いや、あのっ」

三歳年若い小林へ戸惑いに問いかけようとした山田は、当の小林から遮られてしまう。

「さあ、ポイントチャールズ本当の開店だよ。気絶しないでね」

小林の言葉が合図になったのか、正面の壁に掛けられた時計がちよつと二時になった瞬間、来客を告げるチャイムが鳴った。

習慣から、山田は出入り口へ目を向けながら挨拶の言葉を口にしようとした。

しかし、入ってきた来客の姿に開き掛けた口から思わず悲鳴が飛び出しそうになり、小林に脛を思いつき蹴られたことで辛うじて堪えた。

堪えてはみたが、とてもではないが我慢しきれるものではない。

なぜならば、理科室などでお馴染みの人骨模型がカラコ口と骨を鳴らして店内を闊歩しているのだから叫ぶなというのが無理な話である。

しかも、ただの人骨ではなく鎧や剣を持っている姿はゲームや映画で見るアンデットモンスターそのものだ。

山田はカタカタと耳に触る音が、人骨の足音なのか自分の歯が鳴っているのか分からないほど動揺していた。

発作的に叫びそうになる山田を、慣れた仕草で何度も小林が足の甲を思い切り踏みつける。

逃げ出してしまいたいが、狭い背後は所狭しポリバケツが並び、正面には人骨が闊歩し、横は小林が行く手を遮り山田はレジ打ちをするしか道がなかった。

グルリと店内を一周してきた人骨がレジ台へ商品を置く。

拭けばすつきり爽快ボディシートと紙パックのジャスミン茶のお買い上げである。

それは汚れや脂をふき取るもので骨を拭いてどうなるのかとか、ジャスミン茶を飲んでもただ漏れじゃないのかとか、現実逃避か胸中の突っ込みは果てしない。

震える手でバーコードリーダーを翳し、隣にいる小林は黙々と商品を紙袋に詰めている。

金額を言う前に人骨が『お金』を置き、小林から商品を受け取りさっさと店を出ていってしまった。

「ぼうっとしてないで、早く『お金』を後ろのバケツに入れる！」
台に置かれた『お金』を呆然と見つめていた山田に小林が小声で叱咤する。

「で、でも……これ、金じゃなくてダイヤなんじゃ？」
「いいから！」

じれた小林が拳大のダイヤモンドと思わしき鉱石を掴むとポリバケツに放り投げる。

「そんな乱暴に扱ったらっ」

「慣れる！ 次の客が来るからばやばやしてる暇はないよ！」
再びチャイムがなる。

入店した二人連れの客は女性の姿をしていた - - 辛うじて服を纏っていない上半身は形の良い胸を惜しげもなく露わにしており、彼女いない歴ウン年の山田としては目の肥やしなのか毒なのか悩ましい姿である。

顔もキツイ感じの美人と、目がクリツとした可愛いタイプで甲乙つけがたい。

だが、上半身露出狂な痴女の下半身は蛇と蜘蛛である。

彼女達は先週新発売となった缶チューハイ数本と生理用ナプキンを購入していった。

ピンクと黄色が目新しいアレである。

何を言っているのかさっぱり分からないが、キュルキュルグルグルとはしゃいだ調子から気に入っているのかもしれない。

しかし、蛇や蜘蛛な下半身にソレを使えるのかと視線を虚ろわせながら山田はレジを打ち込み、金塊をバケツに放り入れる。

続いてチャイムが鳴った。

某アニメ映画に出てきたなんとか神様のような、歩きたびに泥を落とす謎の物体、山田や小林の膝丈ほどの醜悪な顔をした喧しい団体、人の姿をしたものから、想像上の動物やら神獣聖獣と、それから怒涛のように客が押し寄せ、山田は小林の言葉とおり無心でレジ打ちを努めたのである。

オフィスビル街にあるコンビニが、朝の通勤時ラッシュを迎えるがごとく、ランチラッシュを迎えるがごとく、ひっきりなしに人外な客が訪れて数時間、幾度目かのチャイムが鳴った。

この頃には無心……ではなく、現実逃避の極みとなっていた山田であったが、聞き覚えのある声、我が母国語である日本語を聞いて涙が零れそうになった。

「あゝ、お疲れ。今夜のシフトは山田君なのか」

非常識な状況だというのに平静でいられる小林には期待ができず、

レジ打ちという流れ作業を続けていた山田には、社員である宅配担当河原の登場は強いられた緊張感を緩ませるには十分であった。

河原は昨日の夜勤シフトに組まれおり、今日の夜勤シフトに入っていないかつたにも拘らず、だ。

地獄に仏とばかりに勢いよく出入り口に目を向けた山田は、河原の姿に堪えきれず悲鳴をあげる。

「河原さん、オツツす。今日はモテモテですねえ」

「ス、ス、ス、スッ……っ」

「お。スライムの池に宅配行くのは良いんだけど、もう離れてくねなくて困っちゃうよ。危うく原付まで取り憑かれそうになつてヤバかつたさ」

ふくよかな河原はヘルメット取り外しながらを福々しい笑顔を浮かべ、首から下に纏わり付いているゼリー状のスライムに振るい落としつつ福神のような笑顔でのんびりと答える。

山田の限界はそこまでだった。

うう〜んと唸り声を漏らし、山田の世界は闇に包まれたのである。

遊鈴坂下交差点にあるコンビニは、毎夜丑三つ時になるとどことも知れぬ世界となぜか繋がる。

夜間のバイト代は桁外れで、正社員になると月給も50十萬を越えるらしい。

原付免許を持ち、夜間宅配が出来る者は特別手当も出るそうである。

ポリバケツに山と積まれる金塊や宝石がどのように換金されるのか、どのような伝手があるのか、オーナーの仕事でほかの者は一切を知らない。

ポイントチャールズでは夜間シフトに入れる方を常に募集中です。物事に動じず、どのような状況でもレジ打ちが出来る方の応募を、

従業員一同心よりお待ちしております！

ロンドン (後書き)

DダンジョンSセーブゾーン

大英雄

若い身空で俺は死んだ。

実にバカな死に方だ。酔ってホームから転落、運悪くやってきた電車に轢かれたというわけだ。

まあ、いい。済んだことだ。いや、よくはないがいいと思ってないとやり切れないからな。

それはさておき、今俺は雲の上にもいるのかといったところだ。上を見れば突き抜けるようなすがすがしい青空が広がり、下を見ればドライアイスでも激しく焚いてるのかというくらい脛から先が見えないほど真っ白だ。

電車のけたたましい警笛から気づけば、煙というか靄っぽいものがふよふよと漂う場所に立っていたりする。

三六〇度見渡しても何も見あたらないこの場所で、ぼんやりとしてどれくらいの間が過ぎただろうか。

何の変化も、訪れもなく無為に時間を過ごすのも飽きてきたし、そろそろどこかへ移動してみようかと歩き出したとたん、数歩先に突然女が現れた。

美人だ。俺好みドストライク。多分、万人が万人、美人と思うのではなからうか。

慈愛に満ちたような柔和な笑み、程好いふくよかさは太ってるのではなく官能的だし、形の良い胸、くびれた腰に張りのある尻とボディラインも実に素晴らしい。

透けそうで透けない柔らかな白い布を纏った女は、ローマ神話やギリシヤ神話に出てくる女神のような井出達だ。

「ありがとう」

何も言葉を発していないのに、美女は俺に素敵な笑顔を向けてきた。

何がありがとうなのだ。

「私はわかりやすく言えば女神と呼ばれる存在。あなたの思考が伝わるの」

ならば、あんなことやこんなことを……と思ったら背中にゾクツと寒気が走った。

「あら。結構、聡いのね。あまり変な事は考えないようにね？」

ふふ、と女神が悪戯めいた笑みを浮かべる。

邪なことはなるべく考えないようにしよう。

「さて。あなたは一つの人生を終えて新たな人生を迎えるわけなのだけど、今度生まれる場所は異なる世界。あなたはその世界で勇者となり救世主となる運命。只人ただひとが持ち得ない力を駆使し平和をもたらす人。その強大な力を授けるために、あなたにはここへ来てもらいました」

へえ。とんでもない『力』を貰って生まれ変わるなんて、今度の人生は案外ラッキーなのか？

勇者な俺モテモテ、救世主だからお金もウハウハってか？

そんな俺の思いは筒抜けだろうに、女神はとくに突っ込まず、これから生まれる世界の話をしてくれた。

剣と魔法とモンスターが跋扈する世界とはなんてファンタジー。

地方の小さな村に生まれ、やがて使命に気づき神器を探す旅に出て、モンスターを根絶やしにし平和をもたらす……らしい。

面倒臭えと思ったとたんに女神が笑顔で睨んできたが、そのくらいは許してほしいものだ。

これからその神器を授けるために、女神様の宝物庫へ行って武器を選ぶんだと。

三つまで選んでいいんだってさ。

三種の神器みたいだな。

で、やってきたのがパンテオン神殿っていうの？ 何本もある柱の上に屋根が乗ってるアレだ。

大の男が五〜六人手を繋げたくらい馬鹿でかくてバ力高い柱がいっぱい並んで、右を見ても左を見ても端が見えない。

間口の真ん中に廊下があつて奥まで突き抜けているのだが、突き当たりは見えないほど奥行きもある。

人っ子一人、つか神っこ一人見あたらな静かな廊下を女神と二人で歩く。

左右にはぽつぽつと扉があつて何かの部屋が並んでるわけだ。

そろそろ怠いんだけどなあと思い始めたころ、ようやく一つの扉の前で女神様が立ち止まった。

「中には神器が数多とありますので、その中から三つ選らんできてください。私はここでお待ちしております。中には神器を管理する者がありますので、神器の効果についてはその者へお訊ねください」
そう言つて女神が突き出した片腕を下から上へと払つように振ると、俺の力じゃとつてい開けれそうにもない馬鹿でかい扉が音もなく開く。

微笑んだままの女神を伺いながら、俺がそろそろと室内に入ると扉は静かに閉まつてしまった。

焦った俺はとつさに扉へ駆け寄るが、女神は待つてると言つていたし、さつさと神器を選んでお暇をしようと気を取り直す。

閉まつた扉から改めて室内に目を向けると、そこは金銀財宝の山だった。

とりあえず、手近な場所に近寄り山と積まれた中から金色の物体を一つ手に取つてみる。

バットを寸胴にしたような金色の棍棒だった。

「それは荒ぶる神の武器。手に持てば万人を伏せさせる力を持ちますが、対峙する相手を撲殺せずにはいられない呪いが掛かつております」

俺の周りには誰もいなかったはずなのに、とつじよ背後から掛けられた声に思わず飛び上がった振り返つた。

五センチくらいは確実に飛び上がっていたと思う。

振り返つた先には赤毛の女が一人立っていた。

女神が言つてたこの財宝の山を管理している者だろうか。

赤毛　　といつても、西洋人に見るような明るい茶色とかオレン
ジっぽい色合いではなく、絵の具の赤を塗りたくったような真っ赤
な髪の色で床まで届きそうな長さだからインパクトが半端ない。

自分の常識から外れた見慣れない物を見ると、人というのは妙に
不安な気持ちにさせられるのだとこのとき始めて思ったりしたのだ
が、目の前に立つ赤毛の女は格好も妙だった。

白人と思えるような白い肌、首を隠すように高いカラーのついた
きつちりとした白い服。

きつちりというのは、さぞかし糊が効いてるのだろうと思わせる
硬い布地だからなのかもしれないが。

型崩れしてない様子からきつちりとした服に思える。

肝心の顔は、分からない。

アラブというかベドウィンとかあの辺の踊り子といわれたら、最
初に想像するのは透けた布で口を隠してブラとパンツという衣装を
思い浮かべるわけだが、その口を隠すような布が額にあるんで目が
隠されていてどんな顔をしているのか分からない。

透けていない光沢のある柔らかそうな布だ。

「え……えつと？　アンタがここの管理してるって人？」

心臓に悪い登場をしてくれたもんだから、思わず声が裏返ってし
まった。

「さようでございます。神器の特徴、由来、名、全てを把握してお
ります」

大きくもなく小さくもなく、柔らかかな口調で答えてくれる。

「へえ……で、これは荒ぶる神の武器だったと？」

「はい。その神器を持てば全ての者が平伏します。しかし、彼の神
以外が手にすればこうして目の前に立つ者を憎み、排除しようとす
る呪いが掛けられております」

「……………」

管理人の言葉に、俺は手にした棍棒と管理人を見比べ困惑する。

「ワタクシのこの姿は本来の物とは異なりますゆえ、排除しようと

「いう衝動は湧き起こりません」

「ちなみに、さっきの女神様に会ったら？」

「堪えがたい欲求が湧き起こることでしょう」

「かすかに笑い含んだ言葉に、俺はそつと棍棒を元の場所へと戻した。」

「ついで手に取ったのは棍棒の少し先にあつた、宝石のついた短剣である。」

「なにせ庶民なもので、あからさまに豪華そうな代物とは縁がないんでついついそういう派手な物に目が奪われてしまうのだ。」

「そちらの短剣は例え不利な状況に陥ろうとも必ず勝機を手にする神器でございます。しかし、一度鞘から抜けば刃を血で濡らしておかねばならないという思いに囚われる呪いが掛けられています」
「……………」

「俺は解説をしてくれる管理人を恨めしく見つめてから短剣を元の場所へと戻した。」

「けっして管理人が悪いわけではないのだが、このやるせない気持ちをぶつける相手が管理人しかいないので恨めしく思うくらいは許容してもらいたい。」

「それから、扉から奥へと向かいながら目に付いた神器を手に取り、管理人の解説を聞いたわけなのだが、槍を手にすれば栄光を手にするが誰かを串刺しにしたく呪いがついていて盾を取ってみればあらゆる殺意や害意も跳ね返してくれるが愛情とか好意も跳ね返すので疑心暗鬼になるだとか、金と地位はついてくるが狂人になるだとか、漏れなくついてくる呪いとやらが極端過ぎて、手に取る傍から元へ戻すを繰り返している有様だ。」

「光り輝く神器に目も痛くなり些かうんざりしてきたころ、さまよわせた視線の先に薄汚れた茶色の物体があつた。」

「ミイラだ！ と我が目を疑い素通りしかけて視線を顔ごとそちらへと向けて二度見をしてしまった。」

一瞬見たときは干からびて茶色くなった皮と骨にしか見えなかったが、改めて見たら目の錯覚だったらしい。

茶色と思っただのは少し肌が浅黒いからか？ インド辺りで沐浴でもしてそうな、腰に白い布だけを纏った男は俺よりもがっしりとした筋肉質で、その容貌も眉がキリツとしてて精悍って雰囲気だ。

なんでこんな生気溢れる男をミイラと思っただろうか。

やはり、見慣れない物を見過ぎて疲れてるのだろうか。

男は俺に気付くと座り込んでいた床から立ち上がり言葉を掛けてきた。

「そなたも神に選ばれし者か」

「……まあ、そう……なりますかね？」

「我は勇敢にして英知ある***の子***である。我が徳を認められ、こうして神世に招かれた。我は新たに生まれ変わり、世界を統べる王となるべく、我に相応しき神器を選別しておるところ。そなたも神に選ばれし者として、与えられる神器に恥ずべきことのないよう心されるがよろしかろう」

「はあ、ありがと……」

なぜか名前だけは聞き取れなかったのだが、威丈高にも聞こえる挨拶に聊か気分を害しながらも腰を低くしてしまうのが日本人である。

取り合えず当たり障り無く礼を返しかけたが、男は自分の言いたいことだけを言う俺の返事に耳を傾ける素振りどころか居ない者とばかりに神器選定へ戻ってしまった。

「……………」

「………」

「………」

「………」

「………」

名は既に失われており、この場においては意味のない名です。そのため、あの者は名乗ったつもりでもその名を口にすることはできず、あなたもあの者の名を聞き取れなかったのです。さあ、参りましよう」

管理人に促されて歩き出したが、それにしても話しかけておいて自分の用が済めばお構いなしとは勇者以前に人としてどうかと思うんだがな。

かすかな憤りをやり過ぎせないでいた俺は、その場から離れながら違和感を覚えて男を振り返った。

再び床に座り込んだ男は神器を引つ張り出しては戻し、新たな神器を掴んでは戻してを繰り返している。

神器を見つめる眼差しを見て気が付いた。

そう、目だ。あいつの目がおかしかったんだ。

俺を真っ直ぐ見ているのに、俺が居ないかのような、素通りして遠くを見るような眼差しだったんだ。

初対面の相手へ印象良くしようとする笑顔を浮かべてはいたが、その笑顔は少し歪んでなかったか？

あいつ、いつからここにいるんだ？

そう思ったとたん、ゾクツと背中が悪寒が走った。

「この場に時間というものは存在しません。一瞬でもあり、また無限でもありません」

俺の思いを読み透かしたのか、管理人が問われる前に答えてくれたが分からん。

「……………なら、俺のいた世界でいうとどれくらいの時間なんだ？」

俺は震えそうになる声で口に出して問うと管理人は小首を傾げた。目元を覆う布がさらりと揺れる。

「そろそろ億の年を数えるのではないのでしょうか。あれほど悩む者も珍しいですね。どれを選んで……」

「我は決めた！ 決めたぞ！ 我を裏切る者すべての首を狩り落とすこの鎌に決めたぞ！ この鎌で兄上の首を狩り落としてくれるわ

っ！」

管理人の言葉を遮るように男の大きな声が響いた。

とっさに男を振り返ると、身の丈以上に長い鎌を掲げた男が消えた瞬間だった。

「あの鎌を持つ者は小さな嘘も見逃しません。対峙する者はけつして嘘をつけません。嘘をつこうとした者は、瞬きする間もなく鎌に首を落とされます。あの鎌がよろしいのでしたら……」

そう言葉を切った管理人は、男がそれまで座り込んでいた場所をじつと見つめて押し黙ってしまった。

そんな物騒な鎌はいらないんだが、微妙なところで言葉を切られたら気になってしまう。

よろしかつたら何だというんだ。

管理人の視線の先を隣に並んで見つめて数秒、男が座っていた辺りに例の鎌がカランと音を立てて落ちてきた。

飴色に磨かれ金の細工が施された柄も、磨き込まれた輝く白刃も血塗れとなって。

「あんがい早く戻ってきましたね。あの鎌にいたしますか？」

「っ！ い、いやっ。というか、何で戻ってきたんだ？」

「あの者が死んだからです。おそらく、討たれたのでございませう。あそこまで血濡れになるのも珍しい。よほど恨まれたようですね」

ため息混じりにこぼした管理人に俺は慌てて詰め寄る。

「ちよ、ちよつと待ってくれ！ 今居なくなつたばかりでもう死んだって……っていうか！ あの男は生まれ変わった世界で勇者となつて平和をもたらしたんじゃないのか？」

「さようでございます。先ほども申し上げましたがこの場には時間が存在致しません。あの者は生まれ変わって相応の時間を過ごしたのちに死んだのです。また、確かに生まれ変わり、勇者となって世界に平和をもたらしました。ですが、神器は神の持つ物であり人が長く持ち続けられる物ではございません。簡潔に申し上げます、じ

よじよに神器に人の心を喰われ平常を失います。世界に平和をもたらすほどの覇者が狂ったら……その後は自ずと分かるのでは？」

そう告げた管理人の唇がニイとつり上がった。

俺は漠然と理解した。

魂とはいえ所詮は人だ。管理人も言ったじゃないか。人の心を喰われると。

今の俺と同じように、呪いを持たないまともな神器をと選んでいくうちに、果てしない時間神器に囲まれていた男は魂が疲弊し狂っていったのだ。

ミイラに見えたのは、あの男の、本来の魂の姿だったのか？

いずれは俺もあの男のようになるのか？

俺はどうしたらいい？

そう　どう足掻こうといずれは神器に蝕まれるのだ。

あの男に遮られて聞き取れなかった管理人の言葉はこうだろう。

どれを選んでも結局は同じこと。

俺は生暖かさの残る血濡れた鎌へ近寄り手に取った。

だったら

だったら、さっさと次の人生を終わらせたほうが手っ取早いよな

？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5608q/>

我楽多

2011年10月1日03時23分発行